

アウトリーチ活動

第111回、第112回分子科学フォーラムを終えて

2017年2月3日、第111回分子科学フォーラムが開催されました。今回は特別編として、当研究所で活躍する若手研究者2名によるリレー講演です。テーマは「分子をデザインする」。分子って人間がデザインできるものなの？そんな疑問に「キラル分子建築の匠」榎山儀恵准教授と、「タンパク質分子のデザイナー」古賀信康准教授が、楽しくわかりやすいトークで答えてくれました。目に見えない分子を研究者はどうやって見ているのか、そしてそれをどのようにして人の役に立つデザインに作り変えるのか。分子を操る魔法のような技術があることを知り、私たちがその恩恵を受けるのもそんなに先のことではないと、期待に胸がふくらみました。奇抜な着想と、夢をあきらめない情熱にあふれた二人の研究者のお話に、会場からもたくさんの質問と喝采が寄せられました。



第111回の講師 古賀准教授(左)と榎山准教授(右)

2017年3月24日、第112回分子科学フォーラムには、大阪大学産業科学研究所の永井健治教授をお招きして「生物発光が拓く生命科学と未来社会」というテーマでご講演いただきました。光を放つ生物は一般にもよく知られていますが、永井先生は生物発光の秘密、蛍光タンパク質分子の構造に手を加え、光の色や分子の性質を変えることにチャレンジし続けておられます。その技術により群青色に光る絹糸などが作られ、将来は光る植物が室内の照明や街路樹に利用される究極のエコ社会の実現も可能になるそうです。中でも光を当てると活性酸素を出す分子を作り出し、がん患者の体内に入れることで、がん細胞のみを破壊することができるという未来の医療技術のお話は、会場の皆さんも身を乗り出して熱心に聴いておられました。「夢は叶えるもの」という言葉で締めくくられた先生のご講演。聴衆の皆さんの心にも小さな光をともしただけだと思います。



第112回の講師 永井教授

覧古考新09 | 1986年

放射線と分子の相互作用を解き明かそうとするとときに目の前にたちはだかる問題は気が遠くなるくらい大きい。多中心、多電子系としての分子の励起状態、とくに連続状態について実験家の指標となる理論が熟成され、また逆に実験が理論の不備を明確に指摘するようになるのは何時のことであろうか。

.....

かつて地球上にあった未踏の地というものはもはや無いに等しいが分子の世界には底の知れない深淵や雲を突く絶壁にも似た問題が身近かに山積しており、それらは新しい実験事実がつぎつぎに出されていく中でわれわれにこれまで以上に挑戦的に迫ってくるように思われる。私に関心のある高励起状態の分子や凝縮系での分子動力学などの分野に限っても今後10年の間に実験、理論両面での目覚ましい進展を期待したいし、そのためにはいろいろな役割を分担した研究者の間で赤裸々な告白を含めたコミュニケーションが益々大切になるであろう。分子研が従来にも増してそのような交流の場となることを期待する。

分子研レターズ No.14「分子科学 次の10年に期待する - 1986年 私のメモ」(1986年)

志田忠正(京都大学教授)※

※ 2017年3月に逝去されました。いつも叱咤激励をありがとうございました。